展景

No.65



2012 年 3 月 22 日 発行 通巻第 65 号 オンライン版第 5 号

無二の会 muninokai.com

目次

編集後記	無二の会短信	花粉かしら 結城 文	ドナウ川の源泉を訪ねる 河村郁子	親子して 小野澤繁雄	エッセイ教室「清紫会」の作品より	「清紫会」だより	前号作品短評B	前号作品短評A	対詠 ごきげんいかが? PART 41 小野澤/布宮	〈鳥海山麓だより 4〉 ここで生きる 鈴木京子	〈那須通信 10〉 カタヒバ	お馴染みさん 松井淑子	内村鑑三『代表的日本人——中江藤樹』 新関伸也	近江気まぐれ文学抄 34	切株注意〈短歌〉 小野澤繁雄	春の雷〈俳句〉 岩田都女	もう一年〈短歌〉 池田桂一	ひと日ひと日のゆきかひ〈短歌〉 結城 文	焼夷弾〈短歌〉 丸山弘子	雪〈短歌〉 布宮慈子	/ 、 】ロングンノ / 矢部 / 汽木有三、
			郁子	繁雄		:			布宮	京子	文子	淑子	伸也		繁雄	都女	桂一		弘子	慈子	有一
29	27	25	23	22		21	20	19	17	14	12	11	10		9	8	7	6	5	4	3

\sim 卜 口 スタイム

河村 郁子

ラ ツ 丰 0) 遺 骨は す ベ 7 納 め た り ほ ほえ む 友愛観音様 \sim

骨 壺 0) 失せた る 部 屋 0) 虚 さに手当 り だ 15 0) 写真を飾

耳 か 胸 \mathcal{O} 内 ょ り 声 が す る か あ さん ぼ は ここ に 1 ますよ」

「ただ 7 ま と言 つ 7 も壁 が は ね 返す 吸 (1 込み れ 耳はもうな V

0) 夏 0 猛き暑さをや りすごす わ が身にあまる事引き受けて

秋立ちてそぞろに偲ぶ 折 Z に 涙 をぬ ぐう 私 に気づ

を 吹 き抜 け 風 O静 も り 7 セ ピ ア \mathcal{O} 犬 0) 走 る まぼろし

強 震 0) 痛手 ょ り起ち 7 生 きぬき 君をう B ま う老友とし

足もとに 寄 り Z 1 と しさ忘れ 得 ず ただ ∇ たすら に パ ソ コ ン に対う

霊 粛 O観 音様 に詣でよう遺骨 を預 か り ださるか 5 に

布宮慈子

晴 天 0) 山 形 (1 で 7 吹雪きた る峠 0) 駅 を越え れ ば Z

Z ま 0) 垂 る る 電 線 Z れ で Ł か と持ち上 げ 7 ゐ る 縞 \mathcal{O} 塔

赤 白 0) 鉄 塔 あ ま た並 び を り 東京 \sim 東京 \sim と続 < 高 圧 線

高 圧 線 通 す Z ま に \neg フ レ ツ シ ユ な 放 射 能 未 だ 降 るとふ 見えず

見 えずと Ł ほ h ね た てま \sim Z O玉 \mathcal{O} 玉 虫 色 が X ル 1 ダ ウン

Ш 形 はこと 豪雪、 東京 \sim 行 < た び 雪に て雪女と言は る

B さ さ が 埋 も れ 7 ゐ ま す 屋根 も 木 白 き 曲 線 に 覆 は れ 7 7

ク IJ ス マ ス 寒波 \mathcal{O} 来 れ ば さる ほど に ジ* モテ イ は 言 5 雪ぎ (1 5 ね は

大雪 0) あ と \mathcal{O} 晴 れ 間 ょ きらきらと梢まぶ 輝 け る 木

白る 栲へ 0) 雪 0) 重 み と春を待 つこころ抱 \sim て米どころに生く

*地元の人の意。俗語。

丸山弘子

枳がら 殻を 0) 垣 根 に ょ り て亡き祖 母と焼 夷弾 投下さるる を避け あ き

坂 下 0) 家 に 焼 夷弾落され 燃 え 記 憶 0) 11 ま だ 消えざる

家 O前 0) 広 き 畑 に 焼 夷 弾 0) 落 下 0) 大 穴あ き を 見 た

焼 夷弾 落 5 ことなど 知 る Oな け h跡 地 に 家 建ちならぶ

(1 まも 住 む 隣 組た り 石原 さ h 当時 0) 表 札 そ Oま ま に あ り

疎 開 地 ょ り 帰 り 7 ばらく 住 み し家あ لح か たも な マ ン シ \exists ン 0) 建ち

地 域 セ タ \mathcal{O} 麻 雀 クラ ブ に 入 へるとふ 八 +路 \mathcal{O} 女が 薄化 粧 7

宝は 登ど 山た 0) 臘 梅 Z は 花おそ 哲学堂 0) 庭 に 見 に ゆ

アラジ ン 0) ス ブ 15 まも恋 しきよ豆煮 る 匂 5 湯 \mathcal{O} 滾ぎ る音

は つ 雪は積らずシ ヤ ベ ツ 状 0) まま雪 か き 0) 労 なきを喜ぶ

ひと日ひと日のゆきかひ

結城 文

わ が 街に ŧ 英会話学校とパ チン コ 店 駅前 に あ り 7 明か 灯

Щ 茶 花 O今 年 O花 は 遅 7 寒 \mathcal{O} 底 S を 1 ま だ 咲 きを

ほ つ り は 5 り 新 年 迎 \wedge 7 咲 < 常 O紅 梅 \mathcal{O} 花 (1 ま だ S 5 か ず

S と月余 O乾 燥 \mathcal{O} 0) 5 雨 あ り 7 何 が な 春 に む か \sim 心

茶 畑 Ł 林 ŧ 消 え 富 士 見 通 り コ ン ビ が あ り 力 ラ 才 ケ ボ ッ ク ス へがある

三十 余年 住 み O地 はデラ シ ネ 0) 東京生 ま れ わ れ \mathcal{O} S るさと

分に 本 だ つ た 西 武 線 今 で は 数 分 \mathcal{O} 間 隔 で 走る

白 銀 0) 富 士 が 車 窓 に 見 ゆ るとこ ろ覚え 7 富 士 を見 つ む るならひ

祖 父母 逝き夫逝き母 逝 き 飼犬も 狭 山 市 富 士 見 0) に 帰 れ る

身 0) 近く · 犬猫 が ゐ 7 鳥 0) ゐ る街 に ひ と 日 S と 日 0) ゆ き か S

庭に来る 羽 O目 白 に米屑を撒 朝起き O日 課 Oひとつ

窓際 \mathcal{O} 尺 余 0) 氷柱ら Z O冬はまだまだ伸 び る二月半ばに

指先は凍え るほど 0) 冷たさに 幼 日 \mathcal{O} 顕た つ あ か ぎ れ O手

ラジ オよりきこえるクイ ズ に 答え あ り 頭 をは な れ ぬ言葉に惑う

まだ開 か め 引き戸をさけて遠廻りすることも馴 れ 年 が つ

漆 喰 O壁は 剥が れ 7 竹矢来むき出 0) ままに昔を曝す

蔵 に 添う瓦 0) 下げ 屋や は つ ぶ れ 落ち 分余震続、 に 動

まるき穴空の ぞ が に 見上 げ れ ば 瓦抜け た る蔵屋 根はある

石垣は崩 れ て蔵 は 傾きぬ 修復不能 とひとら語 れ り

定めなきわ が身とおもう Ó と筋 0) 地割 れ は 残る屋 敷にも吾にも

白

妙

に

装

 ∇

神

官

淑

気

か

な

初句会汽笛一声新橋に

初湯かな鏡に写る己が背ナ

松過ぎの厨の芋に芽の兆す

膜の張るホットミルクや冴ゆる月

大寒や真向かひに立つ楠一本

大玻璃の裾よりくもり雪予報

神のもと交すリングや暖炉燃ゆ

ケーキカット編込みセーターお揃ひに

ぐい呑みに喝の一字や春の雷

切 株 注 意

小 野 7澤繁雄

老 人に あ る 幅 置 (1 7 並 み ゆ は 孫 か ゆ つ た り と歩調 似る二人

水 鳥 小 さき頃 は 鮮 明 な 5 め 鮮 明 な る B 成 人 わ れ

云う ことをき か ず に 跳 ね 7 犬そ れ を許 つ つ 1 るよう な 人声

何 か パ フ 才 マ ス 7 1 る が 羽 距 離 置 (1 7 羽元 日 \mathcal{O} \prod に

か

落

ちきら

ぬ

ほうち に

L

冬に

入

り

た

る

葉が

凝

つ

7

木末に

残

か

ぎら

ħ

た

人

か

あ

わ

め

日

 \mathcal{O}

日

交差点

に

も

自

転 車

と

わ

れ

切 が Ł ちう る意 味 0) \mathcal{C} と つ に 7 切 株 注意」 小 ,学校通 りに

枯 原 \mathcal{O} 間 0) み ちをうご も 0) 犬 \mathcal{O} 胴 着 \mathcal{O} 赤 れ る

棟 前 \mathcal{O} 声 と 姿は宅配 便 0) 女性 5 朝 を仕 分け 1 る B

も 0) 思う と () うもな < てこ 0) 間 に に 到 る も 川土手をきて

内村鑑三『代表的日本人——中江藤樹

新関伸出

である。 塾「藤樹書院」を開き、 表的な門人として熊沢蕃山、 し家督を継ぐが、 近江の安曇川に生まれた中江藤樹(一六〇八―一六四八) 米子藩主加藤貞泰の家臣であった祖父吉長の養子となって米子や伊予大洲で過ご安曇川に生まれた中江藤樹(一六〇八―一六四八)は、江戸時代初期の陽明学者 母への孝行と健康上の理由により脱藩し、 一歳で没するまで身分を問わず門人を育てた人物である 近江聖人と呼ばれた。 小川村に帰郷する。 そこで私

学を批判して、 系化していく。 としての家督維持で神経過敏となる。その後『大学』と出会い、孔子の進歩的解釈やポジ な中江を内村は、 して紹介する。 藩主といえども、 中江の思想の背景には陽明学の「朋友」を重視する人間関係論と平等主義がある。 ブな思考を読み取る陽明学に啓発され、この道を究める志を立てる。 知行合一などの実践理論を説く中江は、 中江は若い頃から朱子学を修めたが、 真の人間たる君子の姿とし、また実践道徳に重きを置く日本の教育者と 庶民と同じように泰然と接するエピソードが紹介されている。このよう 内省探求を迫る学問の在り方や武士 比較的自由に自らの陽明思想を体 形骸化した朱子

識がある振る舞いや人物を徹底的に退ける。 るには、 の意味がないことを諭す象徴的な記述である。 と学問と知識を著しく軽んじていた一端を内村は紹介している。 えられる名であって、 諸々の実践において、 毎日善きことを積み、 学識によるのではない。 藤樹は人知れず善きことを重ねる「積善」を美徳とした。 謙譲の心で過ごすことを大切にした。したがって、 徳と人格を重視し「学者とは、 ……学識があるだけではただの 実践倫理なくしては学問 徳によって与 人である」 単に学 徳を得

を当初「義戦」として力説したが、 の活動を日蓮に重ね合わせていたことが窺える。 主義のキリスト教徒であるが、一方でナショナリストでもあった。日本における対外戦争 としては異例 とが特徴である。 周知することを目的にしたものであった。代表的日本人として西郷隆盛、 和訳は『代表的日本人』となり、まさに「日本人とはどのような人物なの さて、 と並んで、 中江藤樹、 四十一)年英文で出版されている。 この著書は日露戦争に勝利し、 国家主義を下地に盲目的な西洋文明の受容に対する批評、 の扱いであり、 英文で書かれた日本の名著の一冊でもある。 まもなく英文の他デンマーク語、 日蓮の五名を西欧キリスト教徒に呼応する人物として取りあげているこ 海外での興味関心が高かったことを裏付ける。 事実を知ることで非戦論へと転向した経緯もある。 原著名は"Representative Men of Japan" 欧米の衆目が日本に集まってい 岡倉天心 ドイツ語に訳され、 『茶の本』 や新渡戸稲造 自らの宗教家として 当時日本人の た時期の 上杉鷹山、 か」を国内外に 内村は "である。 一九〇八 無教会

お馴染みさん

松井淑子

先日、近くの交差点で信号待ちをしていたときのことである。

「いい陽気になりましたね」

た紺のポロシャツを着ている。 と、隣にいた男性から親しげに声をかけられた。 五十代半ばくらいの中 肉中

いまいな顔をしていたせいだろうか。 「ほんとうに」と相槌を打ちはしたもの 男性は Ó 相手は見ず知らずの 人である。 私がよほどあ

「よくお会いしているんだが、 今日は制服を着ていないので、 お分かりにならなかっ

かな」

と言う。さらに

のですよ」 いつもお宅の前あたりの工事現場で、 歩行者の誘導をしている○○警備会社

とつづけた。

を誘導してくれている。この男性もどうやらその一人らしい。 青シャツ、社名入りの黄色いベストといった制服姿の警備員たちが出張ってい 行き交って、歩行者にとっては危険きわまりない状態である。 言われてみると、うちの前の通りは、 電気設備の撤去・埋設工事だと、 のべつまくなしに道路が掘り返され、 やれ水道管の 取り替えだ、 そのため、白いヘルメッ やれガス管 クレーン車が て、 0 取 歩行者 り替え

ん』になっているというのである。 このあたりを受け持つ警備員諸氏からすっかり顔を覚えられ、 男性によると、私は非常にひんぱんに外出し、しかも誘導されるたびに会釈をするの ちょっとした 『お馴染みさ

あって、 など覚えていない のほうが頭を下げ、手を差し伸べて歩行者通路を指示したり案内したりしてくれるからで これには驚いてしまった。たしかに私は誘導されるとき会釈をする。 私の会釈は相手のおじぎに対するい わば条件反射のようなものなのだ。 だがそれは警備 相手の顔

に思い出した。 おなかの中でそんなことを思いながら交差点を渡り切り、 男性と別れたところでにわ

私はひそかに恐縮した。 た。あの親切はお馴染みさんに対するものだったのかもしれない。そのことに気がついて、 連れていき、工事現場を囲っている頑丈そうなフェンスにつかまらせてくれたことがあっ りに入た三、四人の警備員が、 三月の大震災のとき、 ちょうど揺れが始まったころ出先から家の 「建物の中に入ってはい けない」 と叫 前まで帰りつくと、 びながら私を道路側に

〈那須通信10〉

カタヒバ

加藤文子

な存在とも言える。単植でいるわけではなく、 わず胞子を飛ばして着生しているのだ。 いろいろなシダを鉢の中で育てている。 その中でも一番多い 木ものの盆栽から野草の盆栽まで種類を問 のはカタヒバであり、

それも日向の棚の盆栽でも、 日陰の棚であってもどこにでも姿を見せる。

感の異なるみどりが独特な調和を見せる。数えあげたらきりがない。 え隠れしながら生息している。 カツラや五葉松の根元や、 一鉢に数種の野草が共存する中にも、 あるいは、 同族のシノブの鉢の中に入り込んで、微妙に色 間をぬうようにして見

苔が草木に馴染むように、当たり前のようにいるので、あえて名前を問われることもな 当たり前すぎて、 存在を意識されない。

かのように見える。実際、それぞれの植物の輪郭を整えて表情をゆたかにしていると思う。 な馴染み深いシダが草木の間に加減よく点在する様子は、 私が一番最初に見ていたシダは、 晩秋から真冬にかけてほとんどの野草は地上部を枯らして冬眠する。 もしかするとカタヒバであったのかもしれない。 皆をまとめ調整役を担っている 野草が姿を消した



あとに残るのは、黄金色に紅葉した常緑種のカタヒバである。真冬のカタヒバは、 「黄金ヒバ」であることを思い出させる。 別名が

眠から覚めた野草と合流して、 る。そのみどりの葉の間から、萌黄色の新葉も加わって姿をあらわす。芽吹いた雑木や冬 そうして春が訪れて陽気が暖かくなるとともに、黄金色のシダにみどりの色がよみがえ 鉢の中は再びにぎやかになる。

カタヒバは地味ではあるけれど、なくてはならない名脇役であるのかもしれない。

〈鳥海山麓だより 4〉二〇一二年冬

ここで生きる

**木京子

回以上ってこと。 ここひと月は、 食事の 回数より「雪除け」 した回数のほうが絶対に多い。 つまり一 旦

雪を除けるのには、想像以上の力と時間が必要になる。 計らって、 遅れなのでした。 のか理解できなかった。 引っ越してきた当初は、 せめて五センチ位でこまめに除ける。 玄関の戸が開かなくなり、 止んでからすればいいのにサ。 なぜ雪が降り続 V 車は発進できなくなり、 ている中で、 だから、 ご近所さんたちが雪除 ハイ、 小降りになったときを見 止むまで待っていると手 降り積もった大量の 7

はそれは「おぼだぐで ででこぼこに圧雪され、 私はゆっくりやらせてもらいますヨ。 除けを始めるのにも、 さらに朝の七時前に、 当然ながら出遅れていた。 (重くて)」。 これまたご近所さんが、 ほんのわずかとはいえ上昇する気温によってゆるんだ雪は、 早朝の倍以上の労力が必要だ。 ハイ、そう考えた私は愚か者でした。 なぜ、 ガガガー、 みなさん、 ゴゴゴー、 そんなに早くから? グォングォ 通勤の車の轍 ンと雪 それ

不思議がるに違いない。暮らしてみればわかること、 たり前」なのだ。 そんなことは、 それをなぜ私がおもしろがったり、 ここで暮らしてきた人にとっては何十年、 暮らしていないと想像の及ばないこ くどくど説明しているの 何世代と積み上げてきた か、 きっと

で、多くり豊民が井也を奪ってき。也長やそれこそが「ここで生きる」という営みなのではないか。

昨年三・一一の震災とその後の原発事故で、多くの農民が耕地を奪われた。地震や津波によって壊された土地ならまだ再生の建みはあるだろう。だが、いつになったら、娘別能に汚染された土地で食べ物をつくる日が来るのか。

場所と気持ちですぐにでも種をまけばいい来のわからないところで待つより、新しいに耕作放棄地はたくさんあるんだから。将に対すがのであいところで待つより、新しいのよ。日本全国



遊佐町から望む冬の鳥海山

事故直後、 政府や電力会社の対応にひどく腹を立てながら、 東京の友人が言っ

私は同意できなかった。

ナリワイなのだ。 るのか、どんな信仰や祭りがあるのか、用水路や農道の普請は誰とするのか、出荷や販路 が海中だろうが問題の生じない第二次産業と違って、 は誰を頼るのか…。工場内さえ、働く環境が保たれていれば、 していないと想像の及ばないこと」と密接不可分にしか存在できないの 農民は工場労働者とは違う。 。なぜなら、 田植えの時期の水温は何度か、 気候が、 水が、 派遣 風が、 いつごろ風向きが変わるのか、 土が、 された先で、 人が、 慣習が、 どこででも同じように働 「暮らしてみればわかること、 外は夜だろうが地下だろう あらゆることが、 どんな動物や害虫が が、 農や漁という Ź 違うから け 15

ようになるでしょ?」 「そりゃあ、 はじめはたい \wedge んだろうけど、 何年 か B れば、 そこでのや り方が わ か

始めるということだ。 う単位のはずだ。 発展・存続してきた。 なのだ。だから、 べてを知り尽くした土地でさえ、 そりゃあ、 わかるでしょうね。 日本の農業は、農家という世襲によって、技術や知恵を上手に受け渡 "何年か* 代替地で耕作するということは、 だって? でも、 毎年、 例えば、 「お天気」と、人の知恵との根比べのようなもの そんなに軽く言うべきではない。 コメづくり その根比べの知恵袋を一から作 ノは年に一 口 か で きな 何十年とい n

のだと私は思う。 ある土地で農民 (漁民も) であるということは、 「ここで幸せに生きる」 という決意な

それぞれがそれぞれの人生の根を し涙に唇をかみしめながら代替地 「ここ」に下ろし直したのだ。 へ移った人も、 汚染の懸念され る土地 に残 つ た人

売れ残って返品される。 のみなさんは買ってくれない。直売所でいっつも売れ切れだった切り花も、 「農協も県も放射能検査をしています。 花ですよ、 食べ物ではないんです」 前と何も変わっていないんです。 なの 今はほとんど に、 消費者

内容だったのか、 **頑張り続けられる支えは何ですか?** 昨年一一月、 東京のある集会で三春町の女性が訴えていた。 彼女は しばらく無言で考えた後、こう答えた。 静岡から来たという男性が質問した。 このたい へんな状況 思い が け 0) 中で な い

のは食うべなって。 「ずっとこんな状態なものですから、 不安でした。 私も、 でも夫が言ったんです。 うんって言いました」 稲刈りができるのか、 もし、 放射能が出ても、 稲刈りはしてもコ オレら、 ラメが売 つくったも れる

つくったものは食うべな

そうしよう。 買って食べるだけの者にはわかるまい。 これ は、 つく ってい

氷の柱になった二の滝 (遊佐町)

Photo: Suzuki Kyoko



もあるらしい。

あわれな人たちだぜ。

P賛成派の中には、より安全な食品を求め、

放射能汚染の心配がない輸入食品を求める声

「決意」を受け止めたかはわからない。

質問者や会場の人が、どれだけ彼女たちの

来年につなげない。

人が一人そこで人生を送っている。

そこで幸せに生きるために、

している。

そのコツコツと積み上げつないできた決意と誇りは、

東電が放射能をまき散ら

土地と結びついて暮ら

したぐらいで、

砕けない。

ないなら、

次の種まきにつながらない。

今年の時間を、

今年の労働を、

今年の暮らしを、

収穫したものが利用し尽くせ

者の特権だ。

暮らしと労働と収穫物が不可分な農民なのだ。

凍結した玉簾の滝(酒田市)

展景 No. 65

2 1 年

山の端より晴れんとしつつ空の下音するかつて正月準備の粉砂糖のやうな雪が降つてます山形で聞くクリスマス・ソング隣町のミスドに席を占めしときジョージベンソンそれからの楽水の態さまざまありて峠越え山形駅に降り立てば雪	12 12 12 12 月 月 月 月 25 24 19 15 日 日 日 日
粉砂糖のやうな雪が降つてます山形で聞くクリスマス・ソング	12 月 24 日 N
山の端より晴れんとしつつ空の下音するかつて正月準備の	12 月 25 日 0
大家族だつた昔の茅葺き屋根 蔵王の峰は見え隠れして	12 月 31 日 N

2 0 1 2 年

1月2 1月3 1月4 1月4 1月5 1月5 1月7 1月
2 2 2 1 </td

2 月 12 日

Ν

2 月 13 日

O

「あたらしく道路をつくっています」まだ道路は肯定的ひびきする

春告げるやうに配達されし花、

切手の菜の花あかるさを増す

今日虹は架かるかしらんモンテディオ山形ホーム開幕戦に	ようやくに花がひらいてしばらくは竹内さんちの梅と云われる	吹く風に暖かきもの紛るるも一夜明ければ春の雪なり	「春は名のみの」言あれどようやくに土手踏む土を柔らかく踏む	パソコンのマウス替へればさくさくと仕事が進むああこの違ひ	牛乳店はミルクセンターに名を変えつ違いは何だろカルピスも売る	この冬を活躍したるダウンコート地上歩きてもう羽ばたかず	頭をめぐらしてみゆる間は羽ばたかず編成は離れて羽ばたき始む	風のない緩びたる日に声のして大猫あるく雪塊の向かう	農園の真中乾いた音するは風車ときに止り動いて	通り道ならむ黒猫悠々と駐車スペース横切りてゆく	さまざまに命名されて小学校通り「おはなたうん」は幅十メートルばかしの	両脇に白き壁つづくを歩きたり除雪の済みし学童の道
3 月 17 日	3 月 14 日	3 月 10 日	3 月 5 日	3 月 2 日	2 月 29 日	2 月 28 日	2 月 25 日	2 月 24 日	2 月 23 日	2 月 22 日	2 月 18 日	2 月 18 日
N	0	N	0	N	0	N	0	N	0	N	0	N

前号作品短評A〈小野澤〉

●満天星のもみじ葉の赤き華やぎを眩しく思う齢となりぬ

河村郁子

遊にふさわしい小旅だったようだ。どの歌にも順直な喜びが感じられた。 茂吉が歌会で使ったという小教院にその「アウラの名残り」を受けようとする、 ていて、とくに下句には、作者の現在が出ている。新築の家の歌の友を訪問し、歌会をし、 な赤色で、 「木漏れ日のひと日の風情移りゆき朴の落ち葉は地に裏返る」。 「渓谷の流れ清しき」に触れる。昇殿の祈祷に与る「戌年の喜寿なるわれら」は、 「有機農法の野菜料理」を味わう。「秋晴れの朝日を受けて」三峰山に*ーサニック 十首作題「秩父吟遊」、 この歌の通り。 その十首目の歌。 細かい騒がしさ、 どうだん、 といってよいような。 はドウダンツツジ、 歌の運びはゆったりし 「勇み出立」し、 九首目は、こう。 紅葉は鮮やか また、

子が母を母が子どもを思ひやる気持ちの交錯してゐる一日

布宮慈子

ような、 お兄さんの突然の死、そのあとの故郷との行き来、片付け、お母さんの住む県への移転、 近々の作者を慌しく、騒がしいところに追い込んだと思われるところ。 その間のあれこれは、 こちらに世代的なものもあり、 新鮮にひびく。 覚悟を決めた

居れば季節の巡りきて小鳥とともに冬に入りゆく」。 また、「ここで生まれここで死にゆくシンプルと思へるひと世もみぢ葉の燃ゆ」。 季節は巡るもの、 というようなところを越境して、作者は、 それでも、 故郷ではことにそうだろうと思う。 新しい人、 この「小鳥とともに」 になろうとしている。 四首目、「ふるさとに の身近さ。

●初期投資の費用わが家に嵩高し割引率の多しと思ふも

丸山弘子

思案のあるところ、やり取りの経過が、眼に浮かぶような、 に面白く、 首作題は「太陽光発電」。 作者ならずも切実なものがある。 六首目までが、 太陽光発電の設置をすすめられ、 そんな歌になった。 なかなか いろ いろ

災支援)チャリティショー、 はちょっと見ない言い には、作者も「会場にややそぐはねど」と断っている。 後半四首、うち三首 「チャリティショー話芸・和芸の最後なり十四歳の梅丸君の かた、 (あるいはすべて) は、東京オペラシティコンサー の歌。 か。 出し物に落語「目黒のサンマ」 なかで、ボクにはこの歌が面白かっ 『雨の五郎』 もあったらしく、 トホールでの は。 これ (震

前号作品短評B〈慈子〉

は人に置き換えたくなる歌である。 シモツケソウは草であり、 のごとくに」と一緒に読んでしまうからだ。 から庭木として親しまれ、和名は下野国(現在の栃木県)に産したことに由来すると。一方、 「それが判らぬ」等の否定形の歌が並び、 おおよそは花を減らしてシモツケはこの秋風に身を揺らしいつ シモツケは初夏にピンクや白の小花をたくさんつけ、 葉の形状も違うらしい。植物の名はなかなかに難しい。 前の「向き変えてこし車両に道の上うろたえてい いまを生きる息苦しさを表現してい 一連の後半には「名をしらぬ」「患者がい 秋には紅葉する木のようだ。 小野澤繁雄 掲出歌 つ猫 古く

目と呼応して、 の三首があり、 満ちている。 町を訪れたことがわかる。 のだという。 北上川は石巻市北上町で追波湾に注ぎ、 岩手県と宮城県を流れる北上川。 大津波を川が呼ぶとは思はざりき静脈のごとき旧北上川 「津波うけし父祖の墓」「わが石巻を訪ね来つ」から、 五首目の下の句「誰かきて歩むわれのかたへに」 最後に置かれた「あはひよりきれぎれの声 読者を深い哀しみに誘う一首となっている。 一連は、 遠く離れているときの心配と現場を訪れた際の驚きに 登米市津山町付近で新北上川と旧北上川に分かれ、 旧北上川は迫川・江合川と合流して石巻湾に のあとに、 あるひはかなかな」 作者が津波に襲われた 津波が襲う様子 は五 注ぐ

持ちのあらわれである。 同じ気持ちになっていることだろう。「目の前にそのままに」という繰り返しは率 らも住み続けている作者。 いる。 八ヵ月たっても大地震の傷跡を見るにつけ、これが現実と自分に言い 石塀も蔵の破損も目の前にそのままに在り夢にはあらず いや、 原発事故による放射能汚染のことを考えれば、 父親の介護のためにふるさと福島へ行き、 根を下ろしはじめたころに起きた震災である。 日本中、 御尊父が亡くなっ 特に東日本の 聞かせている作者 自然には勝てな 池田 -直な気 てか 人は

いという悲痛な声と徒労感が伝わってくる歌だ。

終焉の地といわれている。 の経過があらわされ、 養虫の 俳句の持ち味なのだろうか、 昨年、 ゆれつつ暮るる義経堂 世界文化遺産となった平泉を訪れての句だが、 さらに義経が生きていた時代と今とが交錯しているように感じられ この 一瓢逸さが V \ \ \ 蓑虫が揺れることによって 近くにある高館義経堂は義経 日の 岩田 時間 都 女

「清紫会」だより

の源泉を訪ねる ◆ 第 89 〈提出作品〉 大石久美・ある青春/小野澤繁雄・雲が動いて-回 一月十七日 /林博子・岬めぐり/ 未 会場・神宮前穏田区民会館一階第一会議室 /松井淑子・バスの中で/丸山弘子・ガンタ 続々/河村郁子・

いたら、 ださり、そのあと夕食もご一緒した。 んとうにおいでくださったのだ。一同大喜び。 第 90 回 六月に会をおやめになった外山滋比古先生がひょっこりお顔をお見せになる。 たまに顔をのぞかせるかも」とおっしゃっていらした由、 十二月十五日 (未)、 会場・文京シビックセンター三階A会議室 これまでのように会員の作品を批評してく 漏れ聞いていたが、 「気が向

ニュース2011の十番目/林博子・牡丹に唐獅子 〈提出作品〉大石久美・落雷以後・戦後の日々/小野澤繁雄・墓地組合、 第 91 口 平成二十四年一月十九日 (木)、 会場・文京シビッ クセンタ 三階A会議室 河村郁子・十大

粉かしら

〈提出作品〉

小野澤繁雄・親子して/林博子・

同期会/松井淑子・若さねえ/結城文・花

(松井)

親 子

小

た感じ。 うになった。下の子が合流できたとき、 回にしたことだ。 つどに、 こちらは仕事の土曜だが、 また焼肉は、 どこかで食事をともにするが、 遅くまでやっているので便利だが、 久しぶりにお兄ちゃんが泊まりでくるとい 家で宴会のようにして宅配の寿司を囲むのも、 牡蠣を食べに使った店も、 こちらの胃に重 甘めの味付けに飽き い感じが残るよ 前

と讃岐うどんの店ができていた。 家はバイパス沿いで、 バ 1 パス沿 (1 はいろいろ店が入れ替わる。 最近は、 台湾料理の

王府という台湾料理の店は、 込んでいて、 ノし待っ て、 座 「敷に案内された。

日本語が少しあやしい若い女性が数人、 注文を聞い たり、 料理を運んだり、 レジに立

たりと走りまわっている。

とになったりとチグハグだ。 慣れているようで、注文も手慣れていた。 厨房が間に合わないのか、 ゆっくりやるしかない。 周りをみても、 一品ずつくらい お兄ちゃんは、 しか出てこない。 居酒屋での飲み会に ビー もあ

彼が支払った。 手土産の地ビールも含めて、互いが親子をして、そうふるまっ たようだっ

団地の真上の方角ら うとうとしたらし 食事の 間 皆既 い。 月食のはなしをした。 時間に起こされた。 かった。外に出るしかなかった。 戻ってきて、 厚着をして、 少し炬燵であたたまったからだは、 階段を下りた。 月は動いていて、

しれない。 色合いは、 これは、 翌朝の朝日新聞一面の写真でみたのより明るめだった。 同僚の言だ。 写真うつりもあるか

があるだろうと、 度して下りていった。 お兄ちゃんは、 思った。 気乗り薄い感じだったが、 若い人とは違って当然だが、 十一年ぶりを強調する父親にしたがって、 いっしょに視たことで、 何か残るもの

台湾料理の店については、 込んでる土日は避けたほうが V 11 ね ということになっ

スロバキアからハンガリー までドナウ川のクルージングをしたことがある。

藤茂吉の足跡を訪ねて」というスクーリングが企画された。 ふれ蘇ってくる。 悠然と、 しかもエネルギッシュに流れるドナウ川に圧倒されたあ このような時、 NHK学園の短歌講座で「ドイツ・ドナウ川源流 の感動が、 今でも折に 斎

ぐに申込書を送った。 東欧十ヵ国を通って黒海に注ぐ国際河川 イツのシュヴァルツヴァルト (黒い森)を水源として、全長二、八○○キロ の源流となれば、 私にとっては夢のまた夢 す

二〇一一年十月十六日朝、 黒い森を目指した。 私たち一行は、 ミュンヘンとウルムにそれぞれ二泊滞在した

でも時折、 世界最高の塔を持つ大聖堂が聳え建っている。 出発地ウルムはドナウ川流域の水の都であり、 視界の開けた草原になったり、 遠くに見える台地の麓に広がる森が見えたり 出発後間もなく塔は樹木に隠された。それ 茂吉も七百段ほどの階段を登ったという

六七七メートルくらいだから急な坂道ではない。 きた。高度と言っても、黒い森の中にあるドナウエッシンゲンの町の高度は、 そのうちに、 左右の木立が迫るようになり、 V くらか高度が感じられるようになっ せい ぜい 7

らとは言え、 いてあるから、 黒い森自体は、 黒い森に入りかけた樹林の、 この辺りから上り坂になるらしい。 「南北に一六〇~二〇〇キロ、 かなり 東西に約六〇キロの高台の平 周囲が霧に覆われてきた。 坦地 バ スの 中か

じられた。 カッコウ時計や赤頭巾ちゃんのお話が身近に感

濃い霧の中を行く幽玄さは格別である。なるべく

窓ガラスに額をつけて、

独り居の感覚に近づけた。

り点在している光景は童心に還してくれる。 教会の周りに、 落が見渡せるようになってきた。 霧が晴れてくると、 屋根と白い壁の家が集まっ 緩やかな起伏 とんがり帽子の いの谷あ $\langle \rangle$ 、に村

えてきて、 流れている。 そろそろ台地に達したらしく、 牛が放牧されている。 これもドナウの源流だ。 牧場には小川が 明るい草原 ここには山 が見



ドナウ川源泉の標識と黒い森

路を覆ってきた黒いモミの木も、 うである。 谷間を流れていた急流もない。 ドナウ 川の童顔を見たよ

黄葉の広葉樹も迎えてくれるドナウエ ッシンゲンに着いた

絶え間なく気泡が立ちのぼり、 源泉と言われている池がある。 今では観光名所になっている。 フェ ルテンベルグ公が長年治めて 直径五メ くつか 0) コ ル インも投げ込まれている。 た所で、 くらいの柵に囲まれてい 城館があ その庭に、 立派な彫刻も立 る。 池の底からは ウ つ

ナウ川の源泉」 この泉の水は源流の とは看做されていないと言う。 一つであるブレ ク川に流れているが、 地理学上では

源泉 溜まった水が流れ出て (am Ursprung) 二体の仏像のような彫刻が為されている平らな石が立て掛けてある。 分ほどバ に向かった。 いるのである。 泉と思しい奥まった所には、 スに乗って、 道路から少し下った所には、 (Donauquelle) 細長い石が土留めのように置いて の標識に従っ 五〇センチほどの石の間 その前の窪み

るような敬虔な気持ちで、 のほかに渋い泉である。 水の面に触れた。 それだけに掛け 替えのない泉に思えてきた。

そこには、 水はブレ 源流であるブリガ 金婚の記念に建てられたという白い彫刻が ッグ川にな ツ り、 ハ 川と合流 町外れ して、 0|道二七号線の の誕生となる。 穏やかな合流を見守り続けて の辺り の ド ナウの 地で、 もう

る。

ドナウ川の源泉 Photo: Kawamura Ikuko

 \overline{z} 中でつぶやく。 かな塵のような、 何 ? と思 黒い うた。 ŧ リビングの のが落ちている。 コ 1 ヒー 「この菊、 テーブルの上に置いた菊 こんな花粉をだすの 0) 鉢 か なあ \mathcal{O} 周 [り に 心

に置 、すんだ感じの黄色 いた。 花屋の店頭にあったのを、 白い 菊の方は花粉をこぼすこともない (1 花弁 Ó 房のような花弁の白い 裏側は沈 淡い 菊とともに求めて、 あまり見か けない 色彩感覚に とりあえずここ 惹

たことで、 初めてと思う。 観葉植物やシクラメンなど、 何となく華やぎのようなものが部屋に加わった。 菊を室内に置くのは、 今でも何個かの植物の鉢が随所にあるが、 今までしたことがなかったが、 二つの花の鉢がふえ こうした経

著だが、 菊のまわりに、 手助けになる記憶は残っていなかった。 五日もたったろうか、 菊の花粉ってあったっけ? 黒い塵のようなものが一層たくさん降りしいている。 水をやりにいって、 かつて庭にあった菊の花のことを思いだそうとした また「おや」と思っ 百合などの花粉は顕 た。 な色彩 O

もない。 ミリの大きさになって、その量もました。 思った。 うより鉢もの まま忘れて何日かすぎた。ふと気づいて、 とりあえず掃除する時に便利なように、 てい な 今この鉢の菊は一番の盛りの時期にあるらしく、 0) 私はしげしげと黄色と赤紫の複雑な色合いの菊をみつめたが、 方が長くたの しめるし、 花が終わったら庭におろしても ならべて置いてある白い そばにいくと黒い花粉のような落下物は一~二 鉢の下に白い紙を敷くことに 花の数も蕾も多い。 菊の方には、 した。 $\langle \cdot \rangle$ V そしてその 切り花で買 なんの変哲 なにもこ

太っている。 に大きくなって 一体になるように貼りつい しかし、 いびつなも 次に いる。 水やりに のもある。 鉢を回しながらしげしげと菊をみつめると、 V て、 そしてついに見つけた。 って驚いた。 青虫が 1 た。長さは三~四センチもあろうか、 一~二ミリだった黒 一つの花のすぐ下に いも Ō は、 菊の花の円の まある ぴっ まるまると たりと茎と V 一部が欠 糞 0)

とはなくなった。 黒い花粉とおもっていたものは、 庭に捨てた。 から鉢は静か そして花壇用の薬品をスプレ になった。 蕾は次々にひらいたが、 その糞なのだ。 私はティ イしてから、 もうまわりに黒い ッシ 鉢をもとの場所にもどし ユ を使って青虫を引き 粉をこぼすこ

ある朝 「おや?」 とまた思った。 今度は白い菊の 鉢のまわり に、 また同じよう

のこしてしまうんだと思い、なにか悲しいような気分になった。 な黒い粉のようなものを見つけた。もう、花粉などとだまされないぞと、目を皿にする。 「見つけた!」今度は、まだ小さい青虫だった。動物って、食べて排泄するから、 証拠を

葉っぱは、 来年咲くかどうかわからないけれど、木の葉がすっかり落ちた庭の一隅に、二種類の菊の しばらくたのしめた菊の花にも終わりがきて、二つの鉢の菊を、それぞれ庭におろした。 師走の風に青々としている。

<u>ニ</u>の 会短信

性で、 自然を大切にする行為を、早く取り戻さないと手後れになる。 の原発事故は、自然の脅威と偉大さを証明してくれたのである。自然破壊の張本人は人間であり、 さを敬遠する人間共に、自然は今度の警告をつきつけているのかも知れない。 イン語で女性を、エルニーニョは男性を指すらしい。それにしても、厳しい寒さに向かうのが女 必ず壊れる、 暖かい状態が男性とは、 例年より寒いと思っていたら、ラニーニャ現象なのだと言う。 とどこかで聞いたことがある。 一瞬首を傾げる。 しかし、 そんなことはない、 暖かい冬に馴れきって、 と思っていたのだが、 ラニーニャはスペ 人間が造ったもの 本当の冬の寒 池田桂一

の足元にある駅名が変わると言う。業平橋駅の名が聞かれなくなるとは。 れたような思いである。「業平の名はとこしえに都鳥」 都女 ◆スカイツリーが我が家のベランダにその全姿を現したのは昨秋であった。 隅田川から歴史を奪わ 近々にスカイツリー 岩田トメ

手の上にのびている道を選択しました。ジョギングコースとしても整備された道です。街中と違っ ◆朝の散歩も、 晴れ上がってくる空の変化も新鮮で、結果二時間の遠出となりました。 一時間ではコースも限られます。 思い切って先日は、 間の橋を渡り、 隣町の川

と反省したが、 の診察を受けた。「血圧が上がっていますよ。どうしましたか」「はい、ペットロス五日目なんで ◆十五年十ヵ月近く飼った犬のラッキーと別れてから半年が経つ。葬送を終えたとき、私の定期 これは自分で治さなければならないことです」。医師に、はしたないことを言ってしまった 今では宣言となって、私を支えてくれている。

貯金はしない。 気から、気と病は一体である。ところでメキシコに一週間ほど滞在した。お金はあるうちに使い、 ◆昨年暮れから高血圧が続いた。これも歳かと諦めて投薬を受けているが、 い国かと思ってしまった。 楽しく暮らし、 人間大好き。気候はいいし、 あくせくしない。 気力が出な 血圧など上がらな V

野町に出掛けた。祭りの日には地元に伝わる無形文化財の歌舞伎が見られるそうだが、 ◆テレビで見てよかったから行ってみよう、とミーハー振りを発揮して、友人と秩父の奥の小鹿 同じくミー ハーらしき一人旅の女性が何人か町をうろついていた。 この日は

おく。 面だ。 ◆この冬はすっかり湯たんぽのお世話になった。 中はホカホカで体を入れるとすぐに眠くなる。次の朝、まだ温かいこのお湯を利用して洗 母の真似をしているだけだが、これも立派?なエコだわと思っている。 やすむ一時間ほど前に湯を沸かし布団に入れて 丸山弘子

じまり、 ◆モンゴルの正月は「ツァガンサル」と言い、二月の旧正月に行われる。ボウズという蒸し餃子 ガンサル」を思うと、 は翌日、二の腕が筋肉痛になった。料理で筋肉痛になるのは初めての経験。 小麦粉で皮をつくり、ひとつずつ包む。 やや気が重い。 年末年始にもボウズをつくるのだが、このとき 間もなく来る「ツァ 山内ゆう子

咲く紅梅は、まだ蕾のまま。 けのことかと思っていたが、 ◆例年、年内に咲く山茶花の花が、今年は一月も終わろうとしている今も咲いている。 なにとなく常でない年のようだ。 少し気をつけて街をあるくと、ご近所でも同じである。 新年早々に わが家だ 結城

編集後記

- するからだ。雪国の除雪にかかる費用は莫大なものだ。自治体の予算も、冬の半ばであらかた使っ 線バスや電車でさえ運休してしまうことがあった。こんなときは、 降ったり、例年の三倍の積雪が観測されたということだ。とうぜん道路の除雪は間に合わず、路 ただひとつ誤算があった。長いこと外にいたら、しもやけができて、今ごろになってかゆーくなっ 原則。天気のいい日は、たのしくできる。 合えないか。除雪は生やさしいものではないし、笑われそうだが、自分なりに「少しずつ片づける」 付き合っていくしかない。ならば、 るから、うまい米ができる。雪は降らなくても困るのである。自然は手加減などしてくれない。 てしまったという。 てきたことである。 いと思い知らされる。 「おいしい米にしてくれよと唱えながら片づける」ことをしてみた。毎日ちょこちょこやるのが 「天から降ってくるものを止めることはできないなぁー」とは山形の人の言。この冬は降りも しかし、 雪下ろしや除雪での事故も多かった。高齢でも無理して雪を片づけようと 思う。米どころは、みな雪国である。雪が降って水がふんだんにあ いきり立って雪に向かうのではなく、 小雪くらいだったら、これまたたのしく除雪ができる。 やはり自然の力にはかなわな 少しでもたのしく付き
- れる。 講師陣もバラエティーに富んでいて飽きることがない。古文書は一種のパズルである。日本語な それよりなにより、試験がないのがいい。 ところだから古い地名にも出くわし、むかしのお大尽の暮らしぶりもわかって興味が尽きない。 文書に詳しい先生方が保存や解読を試みているようだ。講座では、わりにやさしい古文書が選ば のに読めないという歯がゆさを通り越して、読めたときのうれしさは格別。 の古文書を読む」という講座に行ってみた。阿部権内家の文書が大量に残されているらしく、古の古文書を読む」という講座に行ってみた。阿部権内家の文書が大量に残されているらしく、古 ◆河北町谷地に母が住んでいるから、ときどき通っている。ついでというわけではないが、 先生はその回ごとに替わり、高校で教わった先生とか、どこかで見たことのある先生とか、 自分の生まれ育った (布宮慈子)

季刊展景65号

二〇一二年三月二十二日 発行

編集・発行人 布宮慈子

オンライン版制作 堀 哲郎

muninokai.com 無二の会・展景発行所 無二の会・展景発行所